

加能民俗

No.169

弥彦婆と願念坊

抱腹絶倒の芸能文化

大門 哲

一 獅子舞・祇園囃子・俄

1

戦前期までの金沢を代表した祭礼催し物は獅子舞・祇園囃子・俄の三種であるという説明がある。たとえば、昭和四年『稿本金澤市史風俗編第二』は、「催し物は勇壮なる獅子舞と、艶麗なる祇園囃子の外、すべて二輪加と呼び、その規模に大小あり、趣向に巧拙ありて一様ならざれども規模の最大なるのは廃藩の後、始めて催せる大行列と、十二月行事にして、他の藩政のときより行はるる彌彦婆・座頭・願念坊・狐の嫁入・桃太郎鬼退治などとす。みな滑稽を極め、奇想を盡し、看る者をして報復絶倒せしめずんば止まざりき」と説く。

俄とは西日本では路傍や宴席での寸劇をさすことが多いが、金沢の場合、滑稽をもつて観客を楽しませることを目的とする仮装行列の通称として認知されていたとわかる。現在、金沢の祭礼出し物といえば、右の三種のうち獅子舞のみしか伝承されていないが、かつては獅子舞の勇壮さ、祇園囃子の華やかさ、俄の滑稽という異なる三種の魅力を楽しんだわけである。

右記の説明で興味深いのは弥彦婆や願念坊を俄に含むという部分である。同様の説明は昭和七年・氏家榮太郎『昔の金沢』にもみられ、俄について「その種類頗る多く、彌彦婆、座頭、十二月月、大行列、桃太郎、狐の嫁入、願念坊等異形百態、百鬼夜行で観るものをして抱腹せしめる」と説く。

弥彦婆が山伏の祈禱を由来とし、また願念坊は念仏踊を起源とすると諸書に説明されてきたことや、また金石・大野に伝わる現在の弥彦婆（悪魔払）の悠然とした芸態を踏まえるかぎり、ふたつの芸能は滑稽さとは無縁に思える。なぜ、両芸能は報復絶倒の文化として位置付けられたのだろうか。ふたつの芸能の歴史を見つめなおす。

二 弥彦婆の俄化

弥彦婆とは、当山派山伏たちが城下で行った各種勧進活動のひとつである「弥彦送・弥彦払」を系譜とする祭礼催し物である（平成二五年・塩川隆文「近世金沢における山伏の芸能興行山伏の芸能興行」『北陸史学』六一）。和田文次郎は「婆」は「払」の転訛とする（昭和四年『郷史談叢拾遺第一』）。

武器をもつて舞う弥彦婆の芸能の起源については、和田も指摘するように（右掲同）、石動山の山伏が斧をもつて舞う気多神社の斧祭がまず想起される（折口信夫「春来る鬼」）。また弥彦という表記について日置謙や氏家榮太郎は越後弥彦との関係を推測し（昭和四年『石川県史第三篇』・昭和七年『昔の金沢』・昭和一七年『加能郷土辞彙』）、さらに新潟の郷土史家・石川秀雄は佐渡の弥彦婆（弥三郎婆）伝承のルーツをさぐった青木重孝の「佐渡の「弥彦婆」昭和一六年（『高志路』七三号）を参考にしたのか、金沢の弥彦婆と佐渡との関係に想像をふくらませる（昭和五五年『新潟郷土物語』）。

ヤシコから越後弥彦を連想するのは自然だが、そもそも弥彦という表記は近世期から明治三〇年代にかけて自明視されていなかったこと

令和八年三月十八日 印刷
 令和八年三月二十二日 発行
 編集 加能民俗の会編集幹事会
 発行 加能民俗の会 会長 由谷 裕哉
 石川県金沢市出羽町三番一号
 〒九二〇-〇九六三 石川県立歴史博物館内
 振替口座 〇〇七五〇-九一三七三八
 電話 (〇七六) 二六二-三三三六
 印刷 株式会社谷印刷
 金沢市中村町二八-一四
 電話 (〇七六) 二四二-七二六七